



地域に貢献し、地域で学ぶ活動
教養C群サービスラーニング科目

2025年度
シチズンシップ・スタディーズ
活動報告会 資料集

立命館大学サービスラーニングセンター
衣笠 尚学館1階
Tel: 075-465-1952 / Fax: 075-465-8247
BKC セントラルアーク2階
Tel: 077-561-5910 / /Fax: 077-561-5912
OIC A棟1階AN事務室
Tel: 072-665-2195 / Fax: 072-665-2059

(窓口時間:平日 10:00~17:00)

サービスラーニングセンターE-mail: ritsvc@st.ritsumei.ac.jp
サービスラーニングセンターHP: <http://www.ritsumei.ac.jp/slc/>

目次

はじめに

シチズンシップ・スタディーズとは.....	2
活動報告会 次第.....	3
活動報告会 スケジュール	4

発表資料

堂本印象美術館広報プロジェクト.....	5
嵐電×地域×立命館フジバカマプロジェクト.....	7
キャンパス漢字文化普及プログラム.....	9
時代祭応援プロジェクト.....	11
子どもの貧困について効果的な情報発信を考える広報プロジェクト	14
まちの実践ラボ～地域のサードプレイス居場所プロジェクト～	16
草津宿本陣魅力発信プロジェクト	18
草津ブランド商品企画・開発プロジェクト.....	20
茨木みずとわプロジェクト～持続可能な食を考える～	22
国際理解教育外国人ソポーター派遣事業	24
そだちっこプロジェクト.....	26

報告会に寄せて(担当教員からのメッセージ)

謙虚に誠実に向き合う姿勢を(山口 洋典 先生).....	28
継承すること(小辻 寿規 先生)	29
「想定外」を見つめ直す、「想定内」にも目をむける(高橋 結 先生)	30
地域との関係性のゆらぎが育む学びと市民性(秋吉 恵 先生)	31

シチズンシップ・スタディーズとは

— ボランティア活動を通して地域で学ぼう！—

「シチズンシップ・スタディーズ」は、2020年度まで開講してきた「シチズンシップ・スタディーズⅠ」での経験を基盤に、学生実態に合わせて2020年度教養改革で、半期科目として設置した立命館大学サービスラーニングセンターが開講する正課課目です（課外活動ではありません）。この授業は、受講生がボランティア活動を通じて地域に貢献しつつ、地域社会の一員としての自覚と能力を育み、専門知識の応用的な理解を深めることを目標としています。

ボランティア活動は、大学のキャンパス内だけでは得られない、かけがえのない経験を受講生にもたらしてくれます。さらに、地域で活動を行うことは、自らが暮らす地域をこれまでとは違った視点で捉えることを可能にするだけでなく、大学で学ぶ知をいかに地域で活かせるかを学ぶ契機となります。ボランティアプログラムの開発・運営にあたっては、大学やサービスラーニングセンターが地域や海外等も含めた行政、公的機関、NPO、地域組織などと協定（覚書）を締結した上で実施します。ボランティア活動の期間は、数日程度の短期で行うものから、数ヶ月程度の長期で行うものまでさまざまです。受講生が自身の興味や関心に沿って、参加するボランティア活動を選択することができます。

ボランティア活動の魅力を体感しながら、大学で学ぶ知に生きた風を呼び込んでください。

— ボランティアだけど奉仕活動じゃない。授業だけど講義じゃない。

それがサービスラーニング！—

「シチズンシップ・スタディーズⅠ」は、「奉仕活動」ではなく「ボランティア教育」プログラムです。ボランティア教育とは、体験的学習の一形態で、ボランティア活動を中心に事前・事後の学習（研修・振り返り）を組み、明確な教育目的に基づいて行われる教育プログラムです。よって、ボランティア活動を通じて、他者や地域（コミュニティー）の役に立つだけでなく、そこから学習効果を得られるよう設計されます。この点が、純粋な「奉仕活動」との違いです。単にボランティア活動に参加すれば、単位が認定されるというわけではありません！ボランティア活動を通して何を学びたいのか、確かな問題意識をもって取り組むことが重要です。

また、このような教育手法は、欧米ではサービスラーニング(service-learning)またはコミュニティサービスラーニング(community service-learning)と呼ばれています。

2025年度実施プロジェクト・プログラム一覧

2025年度は、下記の地域団体にご協力いただき、49名の受講生を受け入れていただきました。

開講キャンパス	クラス	プロジェクト名	受入団体	担当教員
衣笠	GA	堂本印象美術館活用方法発掘プロジェクト	京都府立 堂本印象美術館	山口 洋典
衣笠	GA	嵐電×地域×立命館 フジバカマプロジェクト	立命館大学 総務部 衣笠キャンパス地域連携課	山口 洋典
衣笠	GA	キャンパス漢字文化普及プログラム	立命館大学 研究部 衣笠リサーチオフィス	山口 洋典
衣笠	GB	時代祭応援プロジェクト	平安講社第八社	小辻 寿規
衣笠	GB	子どもの貧困について効果的な情報発信を考える広報プロジェクト	NPO法人 山科醍醐こどものひろば	小辻 寿規
衣笠	GB	まちの実践ラボ～地域のサードプレイス居場所プロジェクト	ブレンディングコミュニティ	小辻 寿規
B K C	G1	草津宿魅力発信プロジェクト	草津市（草津宿街道交流館）	高橋 結
B K C	G1	草津ブランド商品企画・開発プロジェクト	草津市（商工観光労政課）	高橋 結
O I C	GV	茨木みずとわプロジェクト～持続可能な食を考える～	(一社) みずとわ	秋吉 恵
O I C	GV	国際理解教育外国人ソポーター派遣事業	(公財) 大阪府国際交流財団	秋吉 恵
O I C	GV	そだちっこプロジェクト	みんなのほっとルーム	秋吉 恵

活動報告会 次第

【開催日時】2025年12月21日（日）13：00～16：10

【開催場所】立命館大学 衣笠キャンパス
以学館 地下1階 多目的ホール

【スケジュール】

時間	内容
12:00～13:00	ポスター閲覧
13:00～13:15	オープニング（開会のご挨拶、評価シート説明など）
13:15～13:35	第1セッション
13:40～14:00	第2セッション
14:00～14:15	休憩
14:15～14:35	第3セッション
14:40～15:00	第4セッション
15:00～15:15	休憩
15:15～15:45	受入先講評
15:45～16:00	教員講評
16:00～16:05	閉会のご挨拶
16:05～16:10	事務連絡

活動報告会 スケジュール

【プレゼンセッション時間割】

チームコード	プロジェクト名	セッション①	セッション②	セッション③	セッション④
GA_1	堂本印象美術館活用方法 発掘プロジェクト	○	○	○	○
GA_2	嵐電×地域×立命館 フジバカマプロジェクト	○	○	○	○
GA_3	キャンパス漢字文化普及プログラム	○	×	○	○
GB_1	時代祭応援プロジェクト	○	○	○	○
GB_2	子どもの貧困について効果的な情報 発信を考える広報プロジェクト	○	○	○	×
GB_3	まちの実践ラボ～地域のサードプレ イス居場所プロジェクト	○	○	○	○
G1_1	草津宿魅力発信プロジェクト	○	○	○	○
G1_2	草津ブランド商品企画・開発 プロジェクト	○	○	○	○
GV_1	茨木みずとわプロジェクト ～持続可能な食を考える～	○	×	○	○
GV_2	国際理解教育外国人 サポートー派遣事業	×	○	×	○
GV_3	そだちっこプロジェクト	×	○	×	×

※当日の状況により、一部変更する場合があります

美術館の新しい活用方法の実践

堂本印象美術館活用方法発掘プロジェクト
市川暖人 岡本侑和 阪口明星 栃下怜央 前田一真

1. 本プロジェクトの背景

立命館大学のキャンパスの向かいあるにもかかわらず、堂本印象美術館の10, 20代の来館者が全体の1割程度という背景のもと、

- ①堂本印象美術館の活用方法を考え、実際に取り組む
- ②その取り組みを形に残し、美術館の新しい活用方法を広めるという2つの課題に取り組んだ。

2. 本プロジェクトの方向性

美術館に興味はあるものの、専門性の高さや雰囲気から来館をためらう人が少なくないと感じ、「堂本印象美術館を、初心者が訪れやすい美術館にする」という目標のもと活動した。

3. 企画に至るまでの経過

10月	企画の方向性摸索期 メンバーのみの少人数での活動の限界を認識し、外部を巻き込む必要性を共有。コスプレ、収蔵庫ツアーや、美術館内での企画、学園祭との連携など複数案を検討。学園祭実行委員会と協議するも、連携はすでに期日を超過しており不可と判明。学園祭実行委員会への対抗心や集客の効率性から、学園祭同日にイベントを実施する方向性に決まる。
11月	企画確定・準備本格化期 準備期間に間に合わないという理由から演劇案は断念し、庭園での「人生ゲーム」を中心とした初心者向けイベントを検討。 火・水を使わない、美術館の品位を損なわない条件を確認し、こたつ・塗り絵・人生ゲームを組み合わせたイベント内容に決定する。 予算の検討、企画書・チラシ作成を開始。 レンタル料金が想定を上回ったため、こたつレンタルは断念し私物を利用する方針に変更。 人生ゲームの各マスの内容・配置・ノベルティ案を検討。 チラシ配布計画を立て、学内外で告知を開始。
12月	実施直前準備・広報・搬入期 こたつ・ホットカーペットをレンタカーで美術館へ搬入。 チラシ配布の追加許可取得、学園祭会場での配架が決定。 学内各所へのチラシ配布を完了。 前日準備として人生ゲームのパネル・ゲーム内での金額をメモする通帳の印刷と設営。 学内でビラ配りを行うにあたり学園祭実行委員会からチラシの不備を指摘され、学内配布分は刷り直しを行う。

12月7日（学園祭当日）の流れ

- 10:00～10:30 こたつ、パネルの設置
- 11:00～12:00 チラシ配布 @大学内東側広場
- 13:00～16:30 イベント実施
- 16:30～ 撤収作業

4. 実施内容

①人生ゲーム

美術館の庭園に堂本印象の人生のエピソードに基づいて作成したマスを配置。
マスは全てで17マスで、一回のプレイ時間は10～15分。
参加者には無料招待券と限定ノベルティ（ステッカー）を配布。



②こたつと塗り絵

美術館入口に2台のこたつを設置。
机の上には塗り絵、パステル、お菓子を配置。



5. 結果

当初200人の来場を目指していたが達成できず。人生
ゲーム体験者数：16人
こたつ体験者数：18人チラ
シ配布枚数：110枚

6. 参加者からの声

- ・堂本印象の展覧会を見に行きたいと思った。
- ・「これは芸術か？」と来館者に聞かれて話をする。
- ・大学生になってから塗り絵に熱中するのは新鮮な気分だった。
- ・今日（学祭の日）以外にもしてほしい。
- ・招待券をもらえたから、今度は美術館の中に入ってみたい。

7. 今後の活動に活かす点

本活動を通して、以下の点が今後の課題として明らかになった。

- ①話し合いが美術館職員の谷本さんやESの栗さんから多くの助言をいただいた一方で、その支援に頼ってしまうことが多く、その週のリーダーとなったメンバーが議論を進行するという体制を十分に築けていなかった。
- ②進捗状況の共有が不十分であったことから、レジュメや発表資料の作成が期限直前となり、内容を十分に検討する時間を確保できなかつた。
- ③企画内容を「自分たちが楽しめそうか」という視点で決定した結果、想定するターゲット層が曖昧であった。実際には、大学生よりも上の年齢層の参加者が多いなど、想定と異なる反応も見られたため、誰に向けた企画なのかを事前に明確にし、より効果的な発信や運営を行うべきである。

8. まとめ

本活動では美術館における新たな体験価値として、

- ①庭園を活用し身体を動かしながら会話しつつ芸術鑑賞を楽しむ体験
- ②こたつに入り、リラックスした雰囲気の中で参加者同士のコミュニケーションが自然に生まれる場の二つを実践した。

また、学園祭と同日に実施したことで、学園祭帰りの来館者同士に共通の話題が生まれた。静かに作品を鑑賞することに留まらない美術館の楽しみ方や、屋外空間を含めた新たな活用の可能性を示すことができた。

「嵐電沿線フジバカマプロジェクト」報告会レジュメ

担当：加藤 釘宮 鈴木 中田 前田 吉田 MA YUKUN

1. 本プロジェクトの概要・目的

立命館大学と京福電気鉄道（嵐電）は、2020 年に締結した連携・協力協定を基盤に、2021 年から「嵐電沿線フジバカマプロジェクト」を協働で進めている。本プロジェクトは原種のフジバカマを保全し、地域全体で育てる取り組みで、SDGs の目標 15 「生物多様性の保全」にも位置づけられている。

2. フジバカマについて

フジバカマは、キク科の多年草で、秋の七草として日本では古くから親しまれてきた植物である。かつてフジバカマは河川敷や湿地に自生していたが、環境の変化や開発により自生地は大きく減少し、現在ではフジバカマの原種は、京都府の絶滅寸前種に指定されている。

3. 活動の目標

成果目標：イベント参加者が、他のフジバカマイベントにも参加し、家族や友人を巻き込みながら、ボランティアの輪を広げていくようになる

行為目標：私たちが、参加者に楽しみながらフジバカマの魅力を感じてもらい、次の企画への参加意欲を高めるような企画を協力して作り上げる

4. 活動スケジュール

10月上旬	地域の方（上野さん）、嵐電職員の方（射庭さん）のお話を伺うフジバカマ足湯体験
10月下旬～11月上旬	活動計画の作成、成果目標・行為目標の設定
11月 15 日	草木染め
11月中旬からイベント当日まで	イベント準備（匂い袋、しおり準備、チラシ作成、アンケート作成、スライド・クイズ作成）
12月 13 日	イベント当日

5. 目標達成のための新たな実践

今年は、目標達成のために「体験を重んじるイベント」を意識した企画・運営を行い、「フジバカマ匂い袋・栢づくりイベント」を実施した。該当する目標及びその効果に関しては以下の通りである。

(1) 新たな実施と目標

- ①企画の担当責任者を設置、確認 MTG の実施
- ②受講生が考案した新たなフジバカマに関するクイズの実施、③フジバカマの花を利用したしおりづくり

(2) 新たな実践とその効果

	イベントまでの効果	イベント中の効果
①	それぞれの担当責任者を中心に、全ての企画内容を全員で共有する体制を構築した。	受講生全員が担当外の企画も把握できたことで、指示体制が整い、不測の事態にも臨機応変に対応できた。
②	協力して新たなクイズを考案したため、フジバカマへの理解が深まるとともに、受講生間の連携も強化できた。	参加者同士で楽しく学び、交流が生まれ、イベントの雰囲気が和んだ。
③	準備を通じて受講生間で連携が深まり、イベント実施の際の安全面について考慮できた。	受講生一人一人が進んで作成に取り組み、フジバカマに関する理解も深まった。

6. イベントの効果（アンケート結果より）

〈子供〉 イベントに参加してくれた全 32 人の子供にアンケートを実施した。

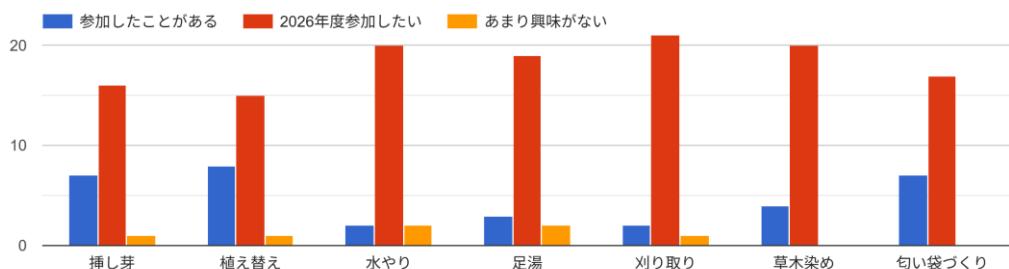
「またフジバカマのイベントに参加したいですか？」という質問に対して、100%の子供が「参加したい」と回答してくれた。また、「次のイベントにお友達を誘いたいと思いましたか？」という質問に対して 30 人が「誘いたい」2 人が「わからない」と回答した。

【感想】（4 名抜粋）

- ・しおりづくりや匂い袋づくりが初めてだったからたのしかったです。（1年・男の子）
- ・しおりづくりや匂い袋づくりは家では出来ないような体験だったので次（来年）も参加したい。フジバカマのプロジェクトに参加したい。（5年・女の子）
- ・このイベントに参加してなかつたらフジバカマを知れなかつたと思う。（2年・女の子）
- ・フジバカマのことも知れてよかったです。また参加したいでーす！！あとフジバカマをそだててみたい！！（5年・女の子）

〈保護者〉 イベントに参加してくれた 28 名の保護者のうち 24 名がアンケートに回答した。

年間活動についての参加経験と今後の参加のご意向



【感想】（3 名抜粋）

- ・挿し芽に参加して、そのフジバカマで制作するというサイクルを感じられてよかったです。
- ・挿し芽もやってみたい。
- ・他の作業も見てみたいと思った。

【分析】

アンケートから今回のイベントを通して子供、保護者の両方で「またフジバカマのイベントに参加したい」と回答した人が大幅に増加していることがわかった。子供たちへのイベントお知らせを通して親世代の方々を巻きこみ、次の企画への参加意欲も高められた。また、「次のイベントに友達を誘いたい」と回答してくれている子供たちが子供の中で 94% を占めている。このことから、次のイベントでも周りの人を巻きこんでボランティアの輪を広げていってもらえるだろう。

7. まとめ

フジバカマの保全活動に関するお話を聞き、地域の方々や嵐電職員の皆様の思いに対する理解を深めたうえで、体験重視のイベントを企画・運営した。クイズやしおりづくりを通じて、子供や保護者が楽しく学び、交流が深まった。運営面では、役割分担と確認 MTG により、協力的な体制を築けた。参加者の前向きな反応が、活動の意義と手応えを実感させてくれた。今後も楽しさと学びを両立しながら、活動の輪を広げていきたい。

キャンパス漢字文化普及プログラム

担当:小幡、佐藤、西川、渡邊

協力:白川静記念東洋文字文化研究所 後援:京都市教育委員会 女性対象:子どもゆめ基金

【本活動の全体像】

立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所(白川研)では、文化勲章受賞者・白川静先生の研究をもとに「漢字が身近な存在であることを思い出す」活動を行っている。

白川研では、衣笠キャンパスで「門名称銘板の設置」やオープンキャンパスでの「古代文字ラリー」、YouTubeでの「古代文字ダンス」、漢字成り立ちソング「おしえて漢字くん！」の制作などを行っており、今回私たちはキャンパスの主役である学生として、学生ならではの感性やアイデアで魅力的な「しあわせ」を考えることが求められた。

【Global Week in OIC】

「漢字探検隊」の活動を詳しく知るために、11/2(月)にOICで行われたGlobal Weekでのブース出展の手伝いをした。

【活動一覧】

- ・呼び込み
- ・出展者アピールタイムでの宣伝
- ・漢字ゲーム(神経衰弱・かるた・間違探しなど)
- ・漢字クイズ
- ・漢字画数bingo

【OICの活動を通して感じたこと・考えたこと】

・人が少なかった(前年の活動と比較すると、今年度は開催場所が入り組んでおり訪れにくかった為)

→衣笠学園祭であれば大学生向けのものを作ればウケがいいかもしれない

→キャンパスに根ざした企画を

- ・カルタの人気がなかった一方で神経衰弱の人気が高かった

→大学生向けを作るといいかもしれない

- ・口頭での宣伝と白川博士のパネル,バナーが案外人寄せの功を奏していた

【衣笠での活動目標】

OICでの活動やそこから思考したことを通して、衣笠学園祭での活動目標を決めた。以下に目標をまとめます。

成果目標:漢字を単なるコミュニケーションの媒体とするのではなく、漢字の成り立ちや意味の面白さを知ってもらう

行為目標:私たち受講生が衣笠学園祭に来場される方が漢字を楽しめるようなゲームを作る

【衣笠学園祭】

学園祭へのブース出展に際し、まずグローバルウィークでの活動から考えた目標を達成にするために、どのような企画が効果的であるか話し合った。

運営の補助として参加した前回と異なり、自分たちで内容を考え、会場のレイアウトも考案した。様々な案が挙げられたが、今回採用したのは以下の4つの案となった。

- ① クイズラリー
- ② カフート(webを用いた4択クイズゲーム)
- ③ クラフト作成(しおり作り、アイロンビーズ)
- ④ 漢字遊び(神経衰弱、部首合わせゲーム)

学園祭までの5週間の間に、それぞれが分担して準備を行い、毎週するべきことを確認しあった。

より漢字の魅力を知ってもらう為に私たちが行った工夫は、主に2つである。

→クイズラリー・カフート・漢字遊びでは、衣笠に所属している学部に関連した問題作成

→クラフトでは、子ども達にも身近に漢字に触れてもらえること、形に残せること

【活動当日・アンケート結果を踏まえて】

◎活動当日

開始当初、人はまばらではあったが、午後から予想以上に多くの方々に訪れていただいた。私たちは主に自分たちが考案したクラフト作成及びクイズゲームを担当した。クラフト作成では、子供達や保護者の方々が多い印象であった。実際に手を動かしながら漢字を用いた作品を作ることができ、熱中する姿を見ることができた点が良かった。クイズラリーでは、学部に関連した内容を作成したが、大学生の方々にはより身近に漢字を体感することができたのではないかと考える。

また、当日はBKCからもサポートとして9名の学生に参加していただいた。

短い時間ではあったが、献身的なサポートをしていただき、スムーズな運営を行うことができた。

◎アンケート結果

クイズラリーの解答用紙の裏側に、アンケートを記載した。

147枚のうち、有効回答は76枚であった。

訪れてくださった方のうち、多くが地域の方々や子ども連れの家族であった。

今回の企画を通して漢字に興味をもったと回答した割合は98.7%であり、ほぼ私たちの目標は達成できたといえ、活動の全体像であった「漢字が身近な存在であることを思い出す」活動ができていたと評価できると考える。

【今回の活動を通して・今後の展望】

人数と準備期間が限られた中での活動だったが、期間内で考案した内容は順調に準備が出来たと考える。全体像である今回は子どもをメインとしたクラフト作成と、学生や大人をメインとしたクイズラリーの分類が目立った。アンケートで収集した今後の企画案等も考慮しながら、いかに多くの人々に漢字について興味を持つてもらえるか、構想していく必要がある。

2025年度時代祭応援プロジェクト

メンバー：七条歩希、寺田晴香、松田唯、LI Lulin

I. 時代祭への参加：多世代が交わる場

時代祭とは

明治28年から始まった、毎年10月22日に平安神宮で行われる京都三大祭の一つ。

幕末の蛤御門の変や東京遷都によって衰えた京都を復興し、京都の歴史と文化を再び誇りにするために、平安遷都1100年記念祭や平安神宮の創建とともに始まった。

①時代祭応援プロジェクトとは

平安講社第八社をフィールドとし、京都三大祭の一つである時代祭の準備・本番に参加して、京都の歴史や文化を深く学ぶ。

②受け入れ団体：「平安講社第八社」について

時代祭を運営する市民団体「平安講社」（明治28年設立）の一つ。大正10年の明治時代列新設に伴い、立ち上げられた。

③私たちの役割

西ノ京中学校で行われた行列練習、平安神宮で衣装の搬出と仕分け、進行路付近の看板掲示などの作業に参加。時代祭当日は、坂本龍馬などの明治時代に活躍した人物に扮した人たちが連なる維新志士列の中で、白丁という役割として、旗を持って歩いた。

↓学んだこと・感じたこと

- ・子どもから高齢者まで幅広い世代との協働を経験し、時代祭が多世代交流を生み出す場となっていると気づいた。
- ・「平安講社第八社」の活動に密着したこと、祭りの担い手が持つ地域文化の維持・継承への熱意と課題を深く理解することができた。

課題・・・

【役員に関する課題】

平安講社第八社の役員は、他の地域活動との兼務により負担が過大となっている。さらに、新たな世代の加入が進まないため高齢化が深刻化している。

【隊士募集に関する課題】

少子化やライフスタイルの変化に加え、時代考証による参加対象の制限（男性のみなど）が、隊士の募集を困難にしている。

II. 地域活動への参加：つながりの重要性

参加した内容

①地域の防災訓練

AEDの使い方、てくてての担架作り、在宅避難のトイレ問題の解決法、段ボールベッドの組み立てなど災害で役立つ知識を学んだ。

②地域のイベント（秋祭りなど）

平安講社第八社の役員の方が携わっている地域の秋祭りで屋台の手伝いをした。

↓学んだこと・感じたこと

- ・災害時、住民同士が顔を知っている”地域のつながり”こそが、防災力の差と頼れる力になる。
- ・地域のイベントは、単なる娯楽としてだけでなく、住民の連帯意識を育み、地域を一つにする重要な役割を担っている。
- ・消防団や民生委員など、様々な市民活動団体が、地域社会を根幹から支える重要な役割を担っていることを知った。

課題・・・

- ・実際の地域の防災訓練の参加者は、若い世代が少なく、高齢者が中心となっており、世代間の偏りが目立っていた。

III. 立命班の先輩へのインタビュー：卒業しても続ける理由とは？

立命班とは

立命館大学の学生が中心となって、時代祭から防災活動などに参加する学生チーム。

私たちは19期にあたる。

インタビューのきっかけ

時代祭や防災訓練に参加する中で、卒業後も活動を継続している立命班の先輩方に出会った。

「なぜ卒業後も参加し続けるのか」という素朴な疑問と、その熱意への強い興味から、先輩方にインタビューを実施した。

先輩たちが語った“立命班の魅力”

【人との出会い・コミュニティの広がり】

- ・お祭りや、防災訓練に関われたことで「多くの人と出会えたこと」が一番の収穫。
- ・尊敬する先輩、大切な仲間と恩師との出会い。
- ・「コミュニティに自分が入れている」という嬉しさ。
- ・地域住民ではないけれど、地域活動に参加できること。
- ・学生と社会人が「対等に協力する」独特のコミュニティがある。

【自己成長】

- ・毎年参加することで、自分の成長を感じられる。
- ・自分が求められる役割があり、責任感が育つ。
- ・就活でも話せるような「自分の人生語れるもの」が増えた。

【社会貢献】

- ・活動を通して地域に貢献できるという実感と誇り。

インタビューについての考察

- ・ 校友同士が、先輩後輩として互いに尊敬し合いながら良好な関係を築いていることが、コミュニティを長期的に維持する力となっている。
- ・ 立命班で得られるものは、単なるボランティア経験にとどまらず、今後の人生観やキャリア観に深く関わる価値ある経験である。
- ・ 立命班を立ち上げた太田さんの頑張る姿は憧れを呼び、奉仕の精神を育む源泉となっている。
- ・ 地域社会と同様に人との関わりを重視しつつも、信頼や経験を基盤にした柔軟な関係性が、立命班を長く続く理想のコミュニティへと導いている。

私たちが立命班に加入して感じたこと

- ・ 立命班の一員として、私たちもこのつながりを次の代へ伝えていきたいと思った。
- ・ 大学の外に出て多世代と関わることで、自分自身の価値観が広がっていった。
- ・ ボランティア活動は「他者貢献・社会貢献」という側面だけでなく、**自分自身が社会とつながり、人間として成長していくための重要な場**でもある。
- ・ 祭りや防災のような地域活動は、**地域の文化・安全・人間関係**を支える大切な基盤であり、将来にわたって守り、継承していくべきだと感じた。

子どもの貧困について効果的な情報発信を考える広報プロジェクト

担当者：片桐楓 三輪優梨子 MA WONGANG

1. 団体の説明

1980年、「おやこ劇場・こども劇場」運動が活発になっていた中、地域に根差した親子の文化に触れる機会を創出することを目標に、京都・親と子の劇場から独立する形で「山科醍醐親と子の劇場」が発足した。1999年から、特定非営利活動法人「山科醍醐こどものひろば」として再スタートした。

現在、0歳から3歳くらいまでを対象とした「げんきスポット0-3」、小学生以上の子供を対象とした「楽習サポート」、「こどもフェスタ」などを始めとした地域連携事業など、様々な活動を展開している。また、京都府や京都市、地域の小学校と連携し、ひとり親家庭への生活・学習・居場所サポート事業も展開している。2011年には厚生労働省から「ボランティア功労者に対する厚生労働大臣感謝状」を受賞するなど、地域と連携した活動を行う団体として高く評価されている。

楽習サポートのびのび（学習会：中学生）

楽習サポートのびのびは、家庭環境によってさまざまな困りごとを抱える中学生などを対象に、宿題のサポートをはじめ、ゲームやおしゃべりを通して、子どもたちが安心して過ごせる時間を持つっている。

2. 課題（ボランティアの広報の対象はなぜ大学生か）

山科醍醐こどものひろばは、子どもとおとなが一緒になってつくってきた団体である。しかし、コロナ禍により大きなイベントは実施できなくなり、活動の規模も徐々に縮小し、これに伴ってボランティアの人数も減少していった。現在は感染症対策を講じながら通常規模でのイベント開催が可能になってきているが、依然としてボランティアは不足している。そこで、地域の大学生に活動へ関心をもってもらい、子どもたちと年代が近いからこそできるサポートを期待して、大学生を主な広報対象としたことにした。

3. 活動の目標と手段

目標 大学生に山科醍醐こどものひろばを知ってもらい、関わってもらう

手段

- ・自分達がボランティアに参加する
- ・ボランティア募集の広報活動

4. 実際の活動内容

○山科醍醐こどものひろばの活動に参加する

- ・まちあるき…団体の活動拠点である京都市伏見区醍醐を歩き回り、子ども達の過ごす地域の特徴を探った。
- ・楽習サポートのびのびのボランティアに参加

○広報活動

- ・チラシの制作 12月をボランティア体験期間とし、2枚のチラシを制作した
- ・チラシを用いたボランティア募集

主に3つの手段を用いて広報を行った。

①サービスラーニング科目でのお知らせ(動画を作成)

②存心館、以学館、清心館、恒心館、教職支援センターにチラシの掲示と配布

※清心館はチラシの掲示のみ

③チラシの配布

11月第4、5週目、12月第1週目に合計4回、衣笠キャンパスにてチラシを配布。(合計200枚)

5. 結果

12月のイベントに合わせ、「公務員および教職志望の学生」をターゲットにチラシを制作、

各学部の掲示板（以学館、存心館、恒心館）への掲示および直接配布（計4回）を実施

⇒チラシ経由の問い合わせは0名

* からの広報のあり方について

参加ハードルの低減と段階的誘導の必要

…初参加者にとって、責任の重い「学習支援（のびのび）」は心理的ハードルが高い

⇒わりと興味を感じる「元気スポット（乳幼児対象）」を活動の「入り口」として設定

まず団体の雰囲気に慣れ、その後に学習支援へと関心を広げる段階的な流れへ

6. 振り返り

【ボランティア活動への参加を通じて】

山科醍醐こどものひろばは、継続的なボランティアだけでなく、単発で参加する学生も多いのが特徴だ。そのため気軽に参加できる場である一方、短期間で子どもとの関係を築く難しさも感じられた。実際に参加してみて、初対面の子どもたちとどう接すればよいか分からず戸惑う場面もあったが、普段関わりの少ない年代と接する新鮮な機会となった。子どもと触れ合いたい人や、地域活動に关心がある学生にとっては、非常に参加意義の高い活動だといえる。

【広報活動の課題と学び】

広報については、結果として助けを求める形にならざるを得なかった点に難しさを感じた。安易な同情や虚像で関心を惹くのではなく、支援の必要性を伝えつつ、対等な関係性をどう提示するか、そのバランス感覚が重要であると考えた。また、今回はターゲットにチラシを届けることはできたが、そこから行動（参加）に繋げるまでには至らなかった。単にチラシを配るだけでなく、受け取った人が実際に足を運ぶための動機付けや、参加ハードルを下げる工夫など、広い視点から広報を考える必要がある。問合せは0件だったが、こうした効果的な広報のあり方について深く考察できることは、本プロジェクトの大きな成果であるといえる。

まちの実践ラボ～地域のサードプレイス居場所プロジェクト～
松野佳恵、山内麻結美、黒川笙土郎、岸優汰、福谷まえ、遠藤鳳楽、青木優和、吉本琉空

1. 受け入れ先「京都ランドリーカフェ」とは

KYOTO LAUNDRY CAFE—「洗濯 × カフェ × コミュニティスペース」をコンセプトに、京都・西院にあるコインランドリー併設型のコミュニティカフェである。家でも職場でもない第三の居場所（サードプレイス）として、誰もが気軽に集い、交流できる場を目指している。

2. ブレンディングコミュニティとは

ランドリーカフェを拠点とし、学生から大人、高齢者まで年齢を問わず、さまざまな国や文化的背景をもつ人々が集まり、対話や学び、交流を行うことができる場を指す。

<ブレンディングコミュニティの目的>

- ・多文化共生の実践と学びの場をつくる
 - ・地域コミュニティと国際ネットワークをつなぐ
 - ・個人と地域、ローカルとグローバルをつなぐ居場所の形成
- 国籍やルーツ、文化の異なる人たちが一緒に集まって、学んだり助け合ったりできる居心地のいいコミュニティを目指している。

3. 活動内容

○10/26 ランドリーカフェでのハロウィンイベント

〈昼の部〉 キッズハロウィンパーティ：近くのお店に協力を得てトリックオアトリートをしたり、料理体験や手作りワークショップ、「英語で遊ぼ」や人形劇、Eゲーム大会など

〈夜の部〉 HALLOWEEN INTERNATIONAL PARTY：外国人や留学生、地域の方々が集まる国際交流型のイベント、フードの販売、体験コンテンツ

気づき・感想：

地域のお店の協力が、まち全体のイベント感を強めてくれたと考える。近隣店舗のトリックオアトリート協力に加えて、人形劇をしてくれた方や、Eスポーツ会社など、さまざまな人が参加。地域の力が合わさり、イベント全体に一体感が生まれた。

多文化・多世代が自然に混ざり合う様子が観察できた。昼の部では子ども・大学生・大人が、夜の部では在住・旅行中の外国人、留学生、障害者など、背景の異なる人たちが同じ空間に集まり、自然な交流や会話が生まれていた。

○11/15 GRID KYOTO ~京都まちの文化祭~

会場：京都市役所前広場・ゼスト御池・市役所前本庁舎内

趣旨：「まちづくり団体による協働」をテーマに、市民・団体・学生が主体的に交流しながら運営する新しい形“まちの文化祭”を目指す。まちづくり活動の発表・体験・出会いの場を通して、京都の地域文化と市民協働の魅力を発信する。

気づき・感想：

学生実行委員としてほかの運営の方々と積極的にコミュニケーションを取りつつ役割を担う中で、任された仕事を最後までやり遂げる責任感の大切さを強く実感した。

当人は外国人観光客や子連れの親子など色々な人が市役所前広場に足を運んだいたことから、ブレンディングされたコミュニティになったと考える。コンテンツの一つであるスタンプラリーでは、スタンプを集める際に他の企画や人と連動する回遊性が仕組まれており、こういう仕組みが人と人をつなぐことを学んだ。

○11/29 KYOTO COMMUNITY MEETUP for International Networking Conference～国際交流パーティ～

会場：京都オープンイノベーションカフェKOIN（京都経済産業センター）

趣旨：多文化共生をテーマに、在日外国人と日本人の交流をはかること

気づき・感想：

多様な文化の人、背景を持つ人と交流する事ができることが、ブレンディングコミュニティならではの魅力を感じた。また、コミュニケーションを取りたいと思う人が集まっており、自然と交流が生まれる雰囲気がある点もイベントの良さをさらに高めていると感じた。ブレンディングコミュニティを一番体現できているイベントと感じた。

4. 振り返りとまとめ

ランドリーカフェや地域イベントへの参加を通じて、私たちは人びとが自然に混ざり合う「ブレンディングコミュニティ」を肌で実感した。そこでは、世代や性別、国籍といった境界を超えたつながりが生まれており、それは誰かに強制されたものではなく、あくまで自然発生的な、ゆるやかな関係性だった。だからこそ、その場には特有の居心地の良さがあり、人びとを受け入れる雰囲気が「サードプレイス」として成立しうることを感じた。

また、私たち自身もその場の参加者として他者と混ざり合うことで、普段の学校生活では関わることのない人々と交流する機会を得た。そこで生まれた偶発的な対話や関係性は、新たなカルチャーに触れるきっかけとなり、グループの中に能動的に交流しようとする姿勢を生み出したよう思う。さらに、人とのつながりだけではなく、その地域の文化や空気感とも溶け合い、コミュニティへの参加が「場所」との関係性をも広げてくれることを実感した。

草津街道交流館・草津宿本陣魅力発信プロジェクト

メンバー：及川昂輝、吉村伽音、石橋櫻、原田智行 / 活動受入先：草津街道交流館・草津宿本陣

交流館と草津宿本陣について

草津街道交流館	草津宿本陣
滋賀県草津市にある市立歴史資料館で、東海道と中山道の分岐点として栄えた草津宿の歴史を紹介している。館内では街道や宿場の地図、旅道具の展示に加え、浮世絵摺り体験などの体験型学習も可能である。東海道関連の地図やポストカードなどのお土産も人気である。	江戸時代、草津宿で大名や公家などが休泊した格式ある施設で、東海道と中山道の要衝に位置している。現存する敷地と建物は全国最大級の規模を誇り、国の史跡に指定されている。現在は一般公開され、上段の間や庭園を通じて当時の宿場の雰囲気を体感することができる。

1. プロジェクト概要

本プロジェクトでは、草津街道交流館および草津宿本陣を対象に取材活動を行い、両施設の歴史や魅力について理解を深め、SNS発信用の動画を制作し、地域の文化資源を広く発信することを目指した。また、活動を通じて施設の大学生世代に対する認知度向上と他に訪問したくなる要素を盛り込んだ広報が必要であると考え、周辺の飲食店も紹介するシンプルなマップを作成した。これにより、訪問者が施設を楽しんだ後、地域全体を散策する動機づけを提供し、地域活性化につなげることを意図した。

2. 活動目標

SNSを利用して草津宿本陣、草津街道交流館の魅力発信を行うという活動を通して、地域の良さと課題について理解し、情報発信能力と協調性を身につける。草津宿本陣などのPRから、地域の文化・歴史への理解を深めるとともに発信力、創造力、責任感を高める。大学生ならではの視点でSNS(Instagram等)の効果的な活用について提案を行う。

3. スケジュール

活動日	活動内容	詳細
9/30,10/7,10/21	事前学習	活動への理解/団体や仲間とのチームワークの育成
10/14	オリエンテーション	地域理解、心構え
10/28	活動計画	活動の実施計画
11/4	活動報告	実施状況の報告と評価
11/11	中間ふりかえり	前半の活動を振り返り
11/18,11/25,12/2	活動報告②	活動を一旦休止し、実施状況の報告と相互評価
12/9,12/16	事後学習	学んだことを今後にどうつなげていくのかを検討
12/21	活動報告会	プレゼンの実施
※11/1,11/8,11/23	現地訪問	動画作成のための素材集め

※授業外活動

4. 活動結果など

大学生がよく見る SNS とは？	交流館・本陣のインスタの改善点
リール動画やオシャレな投稿を見ている。 リール動画については、自分が行きたくなるような Vlog、旅動画をよく見ている。また、流し見できるもの がいいという意見もあった。	フォロワーにしか見られていないため、多くの人のおすすめにあがるような投稿にしたい。デザインや色味に統一感を持たせて見やすくなるような工夫が必要。動画を30秒~1分で曲をつけたものにすべき。

上記の簡単な私たちグループによる分析を踏まえ、草津宿本陣、草津街道交流館などの現地に3回訪問・取材をし、動画作成のための素材を集めた。集めた素材から3本の30~1分程度の動画を作成した。

- ①草津宿本陣のVlog動画→インスタでよく目にする旅動画風の見やすい動画を作成した。
- ②浮世絵体験の紹介動画→ハンコを使用した簡易的な版画体験の手順を紹介する動画。
- ③草津街道交流館のVlog動画→実際に来て見たくなるような動画、音楽もつけて作成。

また、動画だけでは訪問まで至らないという可能性もあるため、実際に来る目的ができるようなマップの作成も行った。特に大学生などは本陣や交流館に来た後に飲食店などに行きやすいと足を運びやすくなるのではないかと考えたので、飲食店を載せて、シンプルさを意識したマップを作成した。



図 作成した動画のサムネイル（左から①,②,③）とマップ

5 課題

交流館とのコミュニケーションの手段がメールを通してのやり取りだったため、コミュニケーション不足があり、動画作成が滞ることなどがあった。また、担当者からのアドバイスを聞きつつ、自分たちが作りたいものをつくることに難しさを感じた。そして、インスタのおすすめにあがるためのアルゴリズムまでは調べることができないため、インスタにどれだけの広報力があるのかわからなかつた。

6. まとめ

今回のプロジェクトで、草津市の文化的な魅力だけでなく、地域社会の特徴にも気づくことができた。くさつ華あかりのイルミネーションイベントでは、子ども連れの家族が多く訪れ、地域が活気に満ちている様子を実感した。このことから、子ども世代を大切にしながら、大学生など若者も巻き込むまちづくりが重要であると考えるようになった。普段の大学生活では見えにくい地域の侧面に触れ、地域理解を深める貴重な学びになった。また、受け入れ先の担当者の方とのコミュニケーションを上手くとることの難しさや広報の難しさを感じた。私たち大学生の視点も踏まえつつ、決められた期間内、自分たちが使える技術や材料、予算などから効果的な企画を考え、提案するのも大変だった。

草津ブランド商品企画・開発プロジェクト 活動報告書

1. メンバー・協力

メンバー：江口悠哉 北口玲奈 中條花音 池内陽菜

協力：草津市環境経済部商工観光労政課 JAレーク滋賀

2. 本プロジェクトの概要

『新たな草津ブランド商品の開発』

草津市では、地域を代表する農産物や加工品を「草津ブランド」として認証し、地域資源の価値向上と市内外への発信を進めている。その中でも草津メロンは主要な認証品であり、草津市民により親しみを持ってもらうためにさらなる付加価値を生み出す新商品開発が求められていた。

こうした背景のもと、大学・草津市・JAレーク滋賀が協働し、学生が地域事業者へ取材しながらブランドの強みを理解し、新たな商品企画を行うプロジェクトが立ち上げられた。

【草津ブランドについて】

「草津ブランド」とは、滋賀県草津市が地域資源を認証し、地域産業の活性化都市のイメージアップを目的として推進している取り組みである。現在は計17品目の農水産物や加工品・工芸品が「草津ブランド」として認証されている。

(参考：<https://www.city.kusatsu.shiga.jp/citysales/tokusanhin/tokusanhin/index.html>)

3. 活動目標

現状、草津メロンは高い知名度を有しているものの、贈答用としての利用が中心であり、価格面から日常的に消費されにくいという課題が存在する。また、加工品が少なく季節限定でしか楽しめないため、市民が年間を通じて親しむ機会が限られている。この問題を解決するため、草津市民に草津メロンをより身近に感じてもらい、そして長く愛される商品を開発する。

4. 活動内容

草津メロンは「高級品」というイメージが定着しつつある。そこで私たちは、草津メロンをもっと身近に感じてもらうことを目標に、まず「なぜ日常的に食べられていないのか」を議論した。主な理由としては、「価格が高い」、「高級品としてのイメージが強い」、「加工品が少なく季節を問わず楽しめない」といった点が挙げられた。

この課題を解決するため、当初は滋賀県の代表的スーパーである平和堂で草津メロンを使った惣菜を開発する計画を立てた。しかし、草津メロンは希少性が高く、何百店舗もの店頭に並べられるほどの量を確保できないため、この案は断念することとなった。

次に注目したのはパンである。近年、国内のパン消費量は増加傾向にあり、私たちが立命館大学琵琶湖草津キャンパスの学生を対象に行ったアンケートでも、回答者の過半数が「週に3食以上パンを食べる」と答えた。パンは手軽に食べられるうえ、比較的安価に作れるという利点もある。こうした背景から、草津メロンを使ったパンの商品開発を行った。

私たちが提案するパンは次の3種類である。

- ・メロンの皮を使ったきんぴらをコッペパンに挟んだ 「メロンの皮コッペ」
- ・メロンの果肉を使った 「メロンフルーツサンド」
- ・メロンパウダーを使い、見た目がメロンそっくりの 「メロンクッキーシュー」

活動月	活動内容
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・草津ブランドについての事前学習 ・商品の方向性決め
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・第1回アンケート作成・回答募集 ・JA レーク滋賀訪問・インタビュー ・第1回試作会・第2回試作会
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・第2回アンケート作成・回答募集 ・COG 提出 ・活動報告
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・草津市へのプレゼン

5.まとめ

本活動では、草津市やJAレーク滋賀からの多大なるサポートのうえ、草津メロンを使用したパンの開発を行った。

現在、販売のめどは立っていないが、今後まちのパン屋にアポイントを取り、販売実現に向けて活動を続けていく予定である。

また、本プロジェクトを通じて、草津メロンを「贈答品」から「日常の楽しみ」へと広げる可能性を確認できた。特に加工品の少なさや季節性という課題を克服することで、年間を通じて市民が楽しめる商品開発につながると考えられる。今後も地域事業者との連携を強化し、持続的な商品展開を目指して活動を続けていく。

みずとわプロジェクト

-報告レジュメ-

【茨木市北部地域の社会課題】

大阪北部に立地し、豊かな自然林と都市部へのアクセスが共存している地域である一方、社会課題としては少子高齢化、立地、交通の便などが挙げられる。

「一般社団法人みずとわ」

みずとわは、清坂terrace、千提寺farmの2か所を拠点に、自給自足が可能な農業を行っている。特に、限りある資源の活用というところを大事に活動をされている。主要生産物は米、鶏卵、独活であり、近代的な農業で一般的な方式は使用せず、自給自足を基幹とする方針の下、あえて人の手が多く介在する方式を取っている、全国的に見ても非常に希少な農業を行っている団体である。また、飼育する家畜や、農産物の生育する環境にも深い配慮をされており、持続可能な農業のために、日々活動している。

【チーム目標】

自分で”両立する農業”について経験し、茨木市の学生に農業の参加について興味を持ってもらう。

【個人の達成度】

渡邊聰介

目標達成度：40%

本ボランティア活動にて、当グループは学生に対し、農業参加への興味を持つてもらうべく、みずとわでの農業体験を通して、農業参入のノウハウ、農業従事者の仕事、収入などの知識を身に着けることと、身に着けたことをどこか発表の場を設けることで、学生に伝えることが目標であった。結果は、残念ながら学生に発表する場を設ける段階には至らず、目標である農業の参加について学生に伝えるための、具体的な行動には出られない状態で終了してしまった。また、私自身、みずとわで体験を通して、農業参入のノウハウを十分に身に付けられたとは言えない状態である。しかし、みずとわにて本格的に農業参加できたことは、十分に有意義な体験であったと考えているため、目標達成度は40%とさせていただいた。

鈴木陽花

目標達成度：50%

学生への広報は実現できなかったものの、自身で「両立する農業」を経験することで地域、ひいては農業界の現状や本来の循環型農業について学びがあったと考え、この達成度とした。活動に参加する中で、農業にはコミュニティが不可欠であると感じた。みずとわさんは地域コミュニティだけでなく、考え方で賛同し集まった人によるコミュニティで活動していた。参加者はそれぞれ異なるきっかけで関わっており、必ずしも「コミュニティを作ろう」として続けてきたわけではない、というお話を伺った。農業に興味のある協力者は常に情報にたどり着くアンテナを張っているため、そういった人に一人でも届くように情報発信をし続ける必要性を活動を通して感じた。

行成紹

目標達成度：30%（今後の活動により50%予定）

活動を通じて、農業を伝えるというフェーズには至れなかったが、伝えるにあたって農業を知る、体験することはできたためこの数値にしている。活動で農業は聞くよりも、実際に見た方が伝わるということを身をもって体感した。期間内に実行に移せなかつたのは、理解が不足していた、時間に余裕がなかつたなど考えられるがそこから、体験してもらう方がわかってもらえるだろうということにも気づけた。そこで学内発表までに大学生に伝えるということはできなかつたが、今後自分の所属する団体に募集をかけて一緒に活動をし、農業という分野に目を向けてもらうきっかけ作りを行う所存だ。

【まとめ】

本プロジェクトでは、茨木市北部地域が抱える少子高齢化や立地・交通面といった社会課題を背景に、「一般社団法人みづとわ」での農業体験を通して、“両立する農業”を実際に経験し、その魅力を学生に伝えることを目標として活動を行つた。

みづとわさんは自給自足を基幹とし、限りある資源を大切にしながら人の手を介した持続可能な農業を実践している希少な団体であり、その現場に参加できたこと自体が大きな学びとなつた。

一方で、期間内に学生へ向けた発表や広報といった段階まで到達できなかつた点は大きな課題である。しかし、実際の農作業や関係者との交流を通して、農業の現状、循環型農業の考え方、農業におけるコミュニティの重要性など、多くの学びを得ることができた。

また、農業は「説明する」よりも「体験する」ことで理解が深まる分野であることを、全員が実感した点も本活動の成果である。今後は、今回の学びを基に、身近なコミュニティや所属団体を通じて体験の機会を広げ、農業に関心を持つ学生に情報が届く形での発信や参加の場づくりを行っていくことが求められる。

本プロジェクトは目標を完全に達成したとは言えないものの、今後の継続的な活動や発信につながる土台を築くことができた点において、意義のある取り組みであった。

2025年秋学期 シチズンシップ・スタディーズ 国際理解教育PJ 報告レジュメ

総合心理学部 玉島 悠成

経営学部 藤井愛菜

活動先について

私たちの活動先

公益財団法人 大阪府国際交流財団 OFIX (Osaka Foundation of International Exchange)

OFIXが目指す未来

「国際都市大阪の実現に向け、広域ネットワークを活かして信頼される多文化共生の拠点機関」

OFIXの業務内容

外国人向けの相談・情報提供、やさしい日本語研修、翻訳サービス、多言語防災、留学生会館の運営、国際理解教育事業(外国人サポートー派遣事業)

国際理解教育事業について

- 国際理解教育を支援するために OFIX で登録している外国人サポートーを府内の小・中・高等・支援学校などに派遣する事業
- 出身国の文化（衣服、食生活、住居、言葉、スポーツ等）や歴史などの紹介
- 民族舞踊や楽器演奏、遊びを通じて、異文化を身体で感じる体験学習
- 環境、経済、教育など特定のテーマについての講義

私たちの活動について

チーム目標

「子どもたちの楽しかったを増やして異文化理解をもっと身近に！」

達成度：25%

- 学校では子どもと直接触れ合う時間が短いと感じた
- お話をした中では楽しかったと感想をもらうこともあった

活動内容

○学校訪問

OFIXのサポートーの方の授業の見学・補助

- 10/31 (金) 平田小学校
- 12/5 (金) 吹田市第六中学校
- 12/5 (金) 守口支援小学校
- 12/12(金)守口支援小学校
- 1/16 (金) 守口支援学校
- 1/30 (金) 守口支援学校

○OFIX事務作業

- 学校からの依頼メールの文章作成
- 国際理解教育事業の一環であるサポーターによる授業のフィードバックの集計

○ふれあい交流祭りの参加

- OFIX ブースの準備、片付け

悩んだこと

- 学校訪問の際にコンテンツが完成されているのでインターン生がサポートする方法が少ないこと
- ふれあい交流祭りの際に、初めて知る文化をわかりやすく参加者に紹介するのが難しかったこと

貢献できたこと

- 子どもたちとの交流をして「楽しい」をサポートしたこと
- サポーターの方の緊急事態に対応したこと。
- 学校訪問の際に、教職員との交流を通して、学校教育における異文化交流に対する現状について考える機会を設けられたこと

今後の展望

- 1月にもボランティアが決定しているため、完遂すること
- 異文化理解教育の現場の様子を現在の活動に生かすこと。
- 異文化理解に対して積極的に学び情報発信を続けること。

まとめ

OFIXは「共存」ではなく「共生」に向けて日々活動されていることを肌で感じることができた。

「共生」には異なる属性を持つ2者以上のお互いの歩み寄りが必要だ。OFIXは国際理解教育事業を通して日本人から外国人へ、外国人向け相談事業を通して外国人から日本人へ双方向の歩み寄りを支援している。私たちは双方の支援を行う現場を見て、相手の理解に努めるだけではなく自身の在り方についても考えさせられた。

2025年度シチズンシップ・スタディーズ

そだちっこくらぶ

報告レジュメ

メンバー：野村 悠仁

活動テーマ

「自分と他者との差を受け入れる力を育むために、ほつとルームでその環境を作る」

「受け入れ先について」

コロナ禍を機に、昨今における子育ての課題の一端が見えてきている。「子と親の感覚のズレ」、「他所との関わりの減少による孤育て」。そこに、「個性・ほめて伸ばす・叱らない」といった子育て方法の隆盛も相まって、子育て情報は錯綜し、親御さんは何が正しいのかわからずに混乱してしまう状況となっている。そして、そんな社会の変化による影響を受けるのは、今を生きる子どもたちだって同じだ。どうすればいいかわからずに、悩んでいる親御さんたちと一緒に育つということになる。

そんな困り感を抱える親御さんと年長さん(5~6歳)を対象として、小学校などでの社会生活を見据えた「個性を生かした生き方」について、考え、実践することのできる環境として、このクラスは設立された。

ちなみに、利用者が来所された際は、「おかえり」と声掛けをし、「教室のような場所ではなく、気軽に立ち寄ってもいい、寄りかかれる場所」をコンセプトともしている。

「そだちっこくらぶについて」

そだちっこくらぶは、年長さん(5~6歳)を対象に、「生きる力」、「逞しさ」を育むクラス。有料であり、受講費は1~3コマで3000円。4~6コマで4000円だ。今年度は週2回、月曜と水曜の15時~16時に開催された。

「根底理念」

創設者殿は「自分の得意なことを伸ばし、自分が不得意だと感じることは他人に頼む」という価値觀のもと、それをするには自身の得意・不得意を把握し、他の人に頼めるかが重要であり、それを養うための芽をこのクラスで紡いでほしいとのことだ。

「参加内容」

- ・ボードゲーム
- ・防災教室
- ・お菓子作り
- ・秋探し
- ・工作教室
- ・自分づかん
- ・クリスマスレースづくり

本クラス利用者

- ・Aくん、Rくん、A,Rくんのお母様
- ・Bくん、Hちゃん、B,Hくん(ちゃん)のお母様
- ・Cくん、Yちゃん、C,Yくん(ちゃん)のお母様

「チーム目標」

本チームメンバーは著者一人で構成されていることを念頭においていただきたい。

そのうえで、第一チーム目標を「自分がもつ子育ての感覚と親御さんの子育てへの感覚を比較・

記録し、その差を思い知る」とし、それらを踏まえた上で5回ほどの活動を行った。

そして、そこまでの活動の振り返りを行ったうえで、中間目標を「子どもさん・親御さんを見る時は、善悪の物差しを持ち出さない」とした。

第一目標の具体的の意味はまだ子育てもしたことのない自分の子育てへの価値観と、今実際に子育てをしている親御さんたちとの価値観の間に実際にどれくらいの差があるのか、それを本人たちに聞いたり、見たりして実感するということを目的としている。

そして中間目標の設定経緯についてだが、それまでの活動を通して、自分が利用者さんたち(の行動等も含める)を「良い・悪い」のものさしで無意識的に判断していたことに気づき、そうするのではなく、その部分をどのように活かすか、その子のためにどうしてあげられるかを考えるという意味も同時に含んでいる。

謙虚に誠実に向かう姿勢を

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授）

<担当プロジェクト>

(衣笠 GAクラス)

・堂本印象美術館広報プロジェクト

・嵐電×地域×立命館フジバカマプロジェクト

・キャンパス漢字文化普及プログラム



「十年一昔（じゅうねん・ひとむかし）」という言葉があります。私の使っている辞書（スーパー大辞林）によれば、「10年たてば昔のことといえる。世の移り変わりの激しいことを、10年を一区切りとしていう語。」と説明されています。この言い回しを借りるなら、今から三昔ほど前、英単語の *decade* という言葉を知ったとき、場所や時代、文化が異なっていても、人は同じように時間を区切り、世界を理解しようとするのだと、小さな感動を覚えたことを思い出します。渡辺美里さんの『10 years』という楽曲に惹かれ、その歌詞をもとに演劇の脚本を書いた経験も、10年という時間単位への関心を深めた出来事でした。

およそ 20 年から 30 年という時間を振り返ってみると、私自身の歩みもまた、いくつかの「十年（decade）」で区切って語ることができます。10 年前、私は立命館大学サービスラーニングセンターの教員として働く一方で、大阪市天王寺区の應典院というお寺で、浄土宗の僧侶を兼ねていました。さらにその 10 年前には、京都駅前のキャンパスプラザ京都を拠点とする大学コンソーシアム京都で、大学間連携による新規事業の企画・運営に携わっていました。そこで働きながら大学院で研究する機会を得たことが、私にとって 1 つの転機となりました。研究テーマはネットワーク型まちづくりの展開過程でしたが、そのフィールドワーク先の 1 つが、後に自ら身を置くことになるお寺だったのです。

私は静岡県磐田市で生まれ、18 歳まで引っ越しませんでした。そのため、お寺で働くことや僧侶になることは、当時の自分にはまったく想像できない進路でした。転機となったのは、大学 1 回生の冬に参加した阪神・淡路大震災でのボランティア活動です。物心ついた頃から「東海地震」へ

の警戒に触れてきた私にとって、その経験は、死と生に否応なく直接向き合う出来事でした。あれから 30 年、言わば 3 昔が過ぎ、語彙（ボキャブラリー）や修辞（レトリック）が豊かになります、表現の幅が広がった今だからこそ言葉でできますが、当時は体験の重さに言葉が追いつきませんでした。その沈黙が、社会人大学院での研究へ、さらには言葉を超えた祈りの世界へと私を導いたように思います。そして振り返れば、こうした経験の積み重ねが、サービスラーニングやシチズンシップを考える教育実践へとつながっていました。

浄土宗は 2001 年、新たな世紀を迎えるにあたり「劈頭宣言」を掲げ、その冒頭に「愚者の自覚」という言葉を置きました。在家から出家し、大学院を修了した後に宗教の世界に入った私にとって、この言葉は、知識や肩書きに安住せず、一人ひとりに寄り添う姿勢を戒めるものとして、大きく心に響いてきました。言い換えれば、「できることに謙虚に、できないことに誠実に」向き合うことです。

そして、縁あって同志社大学大学院総合政策学研究科の教員として招かれた後、2011 年から母校で働いている今、こうした「愚者の自覚」の姿勢こそが、シチズンシップを学び、実践する上での基盤になるのではないかと感じています。私自身の 2 昔、3 昔を振り返りつつ、皆さんにも、やがて「昔」と呼べる時期が過ぎたときに、この「シチズンシップ・スタディーズ」を通じて得た学びや成長の経験を思い返してほしい、という願いを重ね、活動報告会にあたつてのメッセージとさせてください。

継承すること

小辻 寿規（立命館大学共通教育推進機構准教授）

<担当プロジェクト>

(衣笠 GBクラス)

・時代祭応援プロジェクト

・子どもの貧困について効果的な情報発信を考える広報プロジェクト

・まちの実践ラボ～地域のサードプレイス居場所プロジェクト



みなさん、秋セメスターの活動お疲れ様でした。それぞれのプロジェクトを担当していただいた受け入れ団体さんでの活動がこれからも続くという方はたくさんおられると思いますが、授業という枠組みでは一つの区切りとなると思います。

今回は「継承すること」をテーマにメッセージを送りたいと思います。特に私が担当していたGBクラスは各プロジェクトで様々な継承を考えられたことでしょう。

継承というと最近では早見和真先生の小説『ザ・ロイヤルファミリー』がドラマ化され話題になっていました。この話の中では「血の継承」や「想いの継承」がテーマとなっていきます。

『ザ・ロイヤルファミリー』は競馬の話なのでギャンブルの話を学生へのメッセージに書くなと思われる方もおられるでしょうか。今回はギャンブルの話をしたいわけではありません。「血の継承」と「想いの継承」の話をしたいのです。

競馬の主役でもある競走馬。その競走馬はサラブレッドです。サラブレッドは父系を遡っていくと「ゴドルフィンアラビアン」、「バイアリーターク」、「ダーレーアラビアン」のいずれかにたどりつけます。これらは「3大始祖」と呼ばれています。これらの馬の血を継承していることは速さのために大変重要なことです。そして競走馬の個性や適性は父馬、母馬から引き継がれていきます。競走馬が生きる中で血の継承に抗うことは難しいのです。

さて、人間における「血の継承」です。親から子へ遺伝情報（DNA）が受け継がれることを指すわけです。現在では科学的に誤りであり、非倫理的であることはみなさんもよくご存知と

は思いますが、この血の継承は「良い遺伝」と「悪い遺伝」の選別といった人間社会における優生学の歴史において中心的な役割を果たしてきました。

しかしながら今なお、家系や血統を大切にする文化も残っています。地域や祭りなどでもそういったものを大切にしている部分も少なくはなく、そのことについて不思議に思ったり、憤りを感じたりされた方もいるでしょう。

その一方で親から受け継ぐ血を呪いのように感じ苦しむ人にあった受講生もいるかもしれません。どうして、この人がこんなにも傷つかなければいけないのか。

様々な「血の継承」が交錯する場所が地域です。身をもって体感されたのではないでしょう。

「想いの継承」は少し異なります。これは血によっては継承されません。想いをしっかりと届け、理解されないと伝わりません。もしかすると受講生のみなさんも過去に学校の生徒会や部活などの機会でそのことを時間されたこともあるのではないでしょうか。

今回もたくさんの団体のみなさんが受講生に想いを伝えてくださいました。その想いを受けてこれからも活動に関わる方もいれば、他の活動の中でその想いを反映させていく方もいるでしょう。この想いの継承をできることこそが人間の強みであり、人類を受け継がれてきた力の源泉です。

様々な活動は「血の継承」と「想いの継承」の中で日々動いています。その二つをみなさんはどのように受け止め、これからどのような継承をし、どのような継承をしていくのか楽しみにしています。

「想定外」を見つめ直す、「想定内」にも目をむける

高橋 結（立命館大学共通教育推進機構准教授）

<担当プロジェクト>

(BKC G1クラス)

・草津宿魅力発信プロジェクト

・草津ブランド商品企画・開発プロジェクト



G1 クラスの中間振り返りでは、自分たちが立てたスケジュールや、講義前半で設定した「活動の目標」、「学びの目標」において、想定が十分ではなかったという声が聞かれました。主体的に学ぼうとする意欲を持ち、一定の準備をしたうえで活動に参加したはずの皆さんにとっても、実際の現場は想定外の出来事の連続であったのではないでしょうか。

中間振り返りの中で語られたのは、単なる反省の言葉だけではありませんでした。そこには、取り組んできたからこそ生まれた悔しさや、思うようにいかなかつたことへのもどかしさも、消化しきれないながらも表現されていました。こうした想定外への反省は G1 クラスに限らず、シチズンシップ・スタディーズに取り組んだ多くの受講生が、程度の差はあれ持っているのではないでしょうか。

私がみなさんにあえて問いたいのは、それらが本当にすべて「想定外」だったのか、ということです。

例えば、自分たちが組んだスケジュール通りに物事が進まなかつたことや、作成した成果物が思うように活用されなかつたという体験は、地域で活動する方々や、それを支える方々にとって決して珍しいものではありません。こうした事態が起こりうることを事前学習やオリエンテーションで学びながらも、「よくあること」「仕方のないこと」として受け流し、頭にはよぎりながらも自分たちの取り組みのさなかでは

あえて言葉にすることなく通り過ぎてきた結果として、「想定外」と感じられた側面もあったのではないかでしょうか。

本講義を通じて、それぞれの場において大切な役割を担い、地道に活動を続けている人がいること、その活動は必ずしも多くの人の目にとまるものではないこと、そして誰しもが共感、協力をしてくれるわけではないという現実を実感した方も多いはずです。現場の方々から受け取った学びや思いを今後につないでいくために必要なのは、これまで関心を向けてこなかつた自分を責めることではありません。むしろ、これからどのように向き合っていくのか、その姿勢を大学生活の中でどのようにつくるべきか、問い合わせ続けることが大切です。

本講義では、「省察」や「振り返り」の重要性について繰り返し述べてきました。それは、「想定外」の特徴的な出来事に目を向けることだけを意味するものではありません。「想定内であったにもかかわらず、何を見落としていたのか」、また、うまくいったことについて、「なぜ想定が機能したのか」を問い合わせ直し、それらを次の実践へつなげていく営みを重ねていくこともまた重要です。

自分たちの力や考えが及ばない「想定外」は確かに存在します。だからこそ、自分たちが考え得た「想定内」にも意識的に目を向けることが、次の実践に向けた小さな、しかし確かな足がかりになるはずです。

地域との関係性のゆらぎが育む学びと市民性

秋吉 恵（立命館大学共通教育推進機構教授）

<担当プロジェクト>

(OIC GVクラス)

- ・茨木みずとわプロジェクト～持続可能な食を考える～
- ・国際理解教育外国人サポーター派遣事業
- ・そだちっこプロジェクト



滋賀県立大近江楽座 茶レン茶”ーでボランティア

2025年度、いばらきキャンパスで開講された「シチズンシップ・スタディーズ」GVクラスでは、3つのプロジェクトを通じて、茨木近郊地域を舞台に実践的な学びが展開されました。具体的には、「気候変動の影響を受ける農の現場で持続可能な食を考え、実践する」「【多文化共生】を目指し、『違い』や『思い』を伝える」

「子どもたちの生きる力・活ける力を育む」活動です。いずれのプロジェクトにおいても、学生たちは受け入れ先の地域組織が直面する課題に向き合いながら、それらを自らの学びとして引き受けました。

「シチズタ」をはじめとする地域連携学習の特徴は、学生の成長と呼応するかたちで、学生と地域の人々との関係性そのものが変化していく点にあります。例えば、活動の初期段階では、地域の方々が学生を一括りに「学生さん」と呼ぶ関係から始まり、共に活動を重ねる中で、次第に名前で呼ばれる関係へと変わり、やがて「彼ならこれを任せられる」という信頼や、「頼られて嬉しい。もう少し頑張ろう」という応答が生まれていきます。こうした相互作用を通じて、誠実さや公正さといった姿勢が関係性の中に反映され、単なる依頼する側と担い手という関係から、地域の課題に共に向き合うパートナーへと関係が深化していく可能性があります。

一方で、こうした関係性は常に直線的に前進するわけではありません。活動の中では、小さな失敗や説明不足の欠席・遅刻、企画に対する考え方の違いなどをきっかけに、関係性が一時的に後退することもあります。学生にも地域の方々にも多様な価値観や関わり方があり、それらが重なり合う中で、関係性は前進と後退を繰り返す「ゆらぎ」を伴いながら形成されていくからです。

これまで行われた複数の地域連携学習の分析から、こうした「関係性のゆらぎ」こそが、学生により深い成長をもたらす重要な契機であることが明らかになってきました。一度築いたポジティブな関係がゆらぎを経験し、再び前進する過程を通して、多くの学生が教室や地域での態度、さらには地域課題に向き合う姿勢を大きく変化させていきます。同時に、地域の方々も学生との対話を通じて自らの考えを言語化し、他者への向き合い方を見つめ直していく姿が見られました。こうした相互の変化は、学生の市民性や対人スキルの成長にとどまらず、地域側にとっても信頼や協働に対する認識を深める契機となっています。大学と地域が関係性の変化とゆらぎを経験する中で生じる、個々人の態度や価値観の変容こそが、個人、そして地域の社会関係資本を醸成していくのではないか。本科目の実践は、その可能性をあらためて示してくれました。

最後に本報告会で示された成果は、学生一人ひとりの挑戦と、温かく、時に厳しく関わってくださった地域の皆さまの協力によって支えられています。この経験が、皆さん自身のこれから学びや生き方、そして地域との関わりを考え続ける原点となることを願っています。ここで築かれた関係性と問い合わせを、ぜひ次の一步へつなげていただければ嬉しいです。

参考文献：立命館大学研究活動報RADIANT『大学生の地域活動が地域にもたらす価値を探る：「サービス・ラーニング」が変える地域の人々との関係』Issue24いのち輝く, 2025年, pp10-11立命館大学リサーチオフィス
秋吉恵「地域と連携した教育実践（Community Engagement Learning: CEL）に参加する学生と地域住民の相互作用を通じた社会関係資本の醸成プロセス」『地域情報研究』第14号、2025年、pp37-59